

日本英語表現学会第52回全国大会シンポジウム
「文学作品と英語表現指導」

司会: 星 隆弘(文教大学)
提案者: 上村 忠実(福岡女学院大学)
能勢 卓(福岡女学院大学)
中西 典子(同志社大学)
伊藤 佳世子(高野山大学)

要旨

文学作品が大小新旧を問わず英語表現の宝庫であることは自明である。しかし、近年の実践的なコミュニケーション重視の風潮も向かい風となり、「文学作品は文学を学ぶ学生が読むもの」と区別されつつあるのが英語の教育現場の実情ではないだろうか。本シンポジウムは、文学作品の英語教材としての価値を再考し、上記の現状に一石を投じるものである。パネリスト各位の経験と工夫の共有に加え、文学作品に対して学生が示した反応とその教育効果の分析に重点を置いている。上村と能勢の発表では英米文学のクラシックの教材としての可能性が展開され、中西からは学生の興味を惹起してやまないミステリー作品を教材として活用した成果が紹介される。伊藤は広義に文学と言える日本の説話を英語翻訳する講義の実践報告を行う。本シンポジウムが文学作品の教材としての可能性をさらに追求するきっかけとなり、それぞれの教育現場に持ち帰る発見となることを期待する。各パネリストの発表要旨は以下の通り。

上村 忠実

文学作品は、英語表現について研究指導する際の良い材料である。三十年以上教えていると、学生たちが嗚呼そうということかと唸る箇所が見えてくる。予習の段階では気にも留めなかった表現から、解釈の可能性や多様性が展開するのは、学生たちには楽しいことのようなのである。本発表では、英語文学・文化、英語表現、イギリス文学という三科目における実践報告を行う。まず、イントロダクションとして、Charles Dickens の Oliver Twist から数行と、Jane Taylor の“The Star”から第1連と第3連を取り上げて、学生たちが読み飛ばす表現と誤解している表現について解説する。次に、本論として、William Blake の Songs of Innocence and of Experience から“The Sick Rose”を取り上げる。桂冠詩人 Cecil Day-Lewis は、この詩は何を意味するのか分からないと述べているが、学生たちは何を意味すると考えるのか。学生たちの解釈を示したあと、表現に内包される象徴性について解説する。

能勢 卓

福岡女学院大学で担当している「交流文化論(アメリカ)」、「アメリカ文学の変遷」、「アメリカ文学」「アメリカ文学作品研究」などの授業において、詩、エッセイ、短編小説、演劇作品を取り上げている。今回のシンポジウムでは、これらの授業において取り上げたアメリカの文学作品に中で学生たちがどのような表現に興味を示したかについて、学生たちから提出されたコメントの内容を例に出しながら実践報告をしていく予定である。アメリカ詩については Emily Dickinson の作品を、エッセイについては Henry David Thoreau の Walden のごく一部と Frederick Douglass の“The Race Problem”を、また短編小説としては O. Henry の“The Gift of the Magi”を、そして演劇作品としては Eugene O’Neill の Long Day’s Journey into Night から例を取り、学生がどのような単語のコロケーションや文の構造、またはレトリックの展開などに興味を示したのかについて説明していく。

中西 典子

純文学ではなくて大衆文学に分類されるミステリーは、学生たちにとって自ら辞書を片手に読み進めたい魅力を持っている。1966年にアメリカで出版された映画監督アルフレッド・ヒッチコックが編集したミステリー集から選ばれた短編ミステリーを、この30年間で何度も英米文学専攻以外の英語の授業で教えてきた。その中で人気の高かった短編“Contents: One Body”(C. B. Gilford)を使った授業で、学生たちがストーリーを理解する上で興味を示した英語表現を取り上げる。授業で課したレポートに、「なぜ無実の女主人公が犯人にされてしまったのか」について考察したものが多かった。その中で、登場人物の性格描写の表現、主人公が犯人である証拠とされた手紙の英語表現などが注目されていた。これらに加えて、比喩表現や視点の問題(語り手が誰の視点で語っているか)がこのミステリーの展開にどのように関わっているかを明らかにする。

伊藤 佳世子

高野山大学では「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成資産を有する環境をいかし、「高野山国際ガイド体験」という独自の講義がある。本年度も約 300 組の外国人にガイドを実施した。この講義では重要文化財だけではなく、大学図書館に所蔵されまだ一般に知られていない高野山の逸話や仏教用語を英語に翻訳し、外国人参詣者に英語ガイドをしている。仏教逸話の翻訳のためには例えば「閻魔」や「お祓い」だけでなく、「三鈷杵」や「声明」(しょうみょう)など日本人にも聞き慣れない用語も含まれる。そのため難解な用語ごとに説明を加えながら英訳し理解することを優先にすれば、逸話の持つリズムが壊れてしまう。講義ではそれらをどのように翻訳すれば、内容が適切でしかも外国人に理解しやすいものであるかを述べていく。